

宿縁

二月号

千葉県市川市国府台五丁目二十六番三十九号

浄土真宗
本願寺派
中原寺

TEL 〇四七—三七二—〇二九二
FAX 〇四七—三七二—〇二六二

人間の闇を深くする 根源にあるものとは



イスラム国と名乗るイスラム過激派組織による人質斬首事件は世界中をおどまし、恐怖と怒りに陥れました。そしてその裏には宗派的対立と民族、政治、思想、貧困など複雑に絡み合った長い歴史のあることを知ります。人間は誰もが自由や平和や平等を口にしますが心の底の部分では差別と争いと排除の自我(我が中心)に束縛された闇を抱えていると言わざるを得ません。

だから人間の智慧では容易に問題解決できないことを認めているからこそ宗教に

すがり、解答と救いを求めるのでしょうか。

今回のイスラム過激派組織による残酷な行為に対し、早速にヨルダン政府は報復を宣言し、また有志連合の国々も相手を殲滅する行動に出ました。人質に取られ殺害された日本政府の声明も相手を激しい口調で非難するものです。

こうした動きには賛否両論があります。が、大切なのは一人ひとりが自らに問いかけてその時の感情や大勢に流されないしっかりとした意見を持つことだと思います。

ここに伝えられている親鸞さまの生涯の師であった法然聖人の父の非業の死にまつわる有名な話があります。

父親の漆間時国は美作国久米の押領使(おくりようし)で地方の治安維持にあたる豪族だったようです。土地争論に関連し、ある夜反対派の夜討ちにあつて非業の死を遂げたのは幼名勢至丸(後の法然)が九歳の時でした。臨終の枕辺にいならぶ家族に向かって、「われこのきずいたむ。ひとまたいたまざらんや。われこのいのちを惜しむ。人あに惜しまざらんや。」と、つよく仇討ちをいましめられたのです。

この遺言が法然出家の動機となりました。さとりを目覚めた仏陀のことば(法句経)には、「怨みは怨みによって果たされず、忍を行じてのみ、よく怨みを解くことを得る。これ不変の真理なり。」とあります。即ち、

血は血によって清められるのではなく、怨みは怨みによって報われるものではない。ただ怨みを忘れることによってなくすことができるということです。

ここで仏陀(仏)と神の違いについて学んでみたいと思います。仏陀とは覚者(めざめたもの)という意味で、真理をさとること、ユダヤ教やキリスト教やイスラム教の絶対者である神ではありません。これらの神(ヤウエ、ゴッド、アツラーも同じ)はこの世を作った創造神で唯一絶対の存在なのです。

つまりこの世を作った創造神には人はただその思し召しの御心に従うのみです。したがってモーセもイエスもムハンマドも神の啓示を受けた預言者なのです。預言者とは、神の言葉を預かり、人に知らせ新しい世界観を示す人です。ムハンマドはその最後の預言者とされます。仏教にはこの世界を作った神という存在がなく、世界の始まりとか宇宙の終わりとか、そういった問題に対しては基本的には語っていません。なぜならこれらの問題はすべての人が一つの答えを共有することができないからです。だから仏教には世界創造神話がなく、この世がそもそも存在していることを前提としていますから、どう今を生きるかとの実践主義的な宗教なのです。

これについてはまた有名な仏陀のたとえ話があります。

あるとき釈尊のところにマールンクヤという弟子がやってきて死後の世界があるか、宇宙は有限か無限か、を問いかけてきました。すると釈尊はこう答えたのです。

「ここに毒矢で射たれた男がいる。友人が心配して、医者連れてきて毒矢を

抜き治療しようとしたとき、その男は“待てこの毒矢を抜いてはならない。矢を射た奴が誰なのか、背が高いのか低いのか、毒矢の成分は何なのか、それがわからぬ以上一切この矢は抜かせない”とそういうことをいつている。そのままではこの男は死んでしまうだろう。いま大事なことは毒矢を抜いて治療することである。現在の苦しみをしっかりと克服することが大事だ。」

こうした仏教の考え方は、他の宗教でも同じで、明日以降のことはすべて神の領域の問題だという態度です。たとえばキリスト教でも、「明日のことを思い煩うな。今日一日の苦勞は今日一日で足れり」という言葉があります。ただ他の宗教は絶対的な神の言葉を預言者が民衆に伝えるので命令形になるところから、仏教のように自らを通して真理にめざめるということがない嫌いがあります。

元来宗教にはその正当性を主張して、ある宗教以外は認めないという排他的な思いを持っていません。他の宗教を信じている人に敬意を払うという態度がないとそこには果てしない対立と抗争があるのみです。

親鸞聖人の門弟の一人が師から離脱していったとき、そのものが持つていったお聖教を取り戻しましょうと、ある弟子がそのものを激しく非難しました。親鸞聖人は「その必要はない。たとえその者が大切なお聖教を野山に捨てたとしても、それが縁となって野山の動物たちが救われるということもある。」とたしなめられたことがあります。

人間の主義主張をつらぬくために宗教を利用することがあつてはなりません。

【寺灯雑記】

○作家青木新門と行くインド仏跡の旅
1/13〜21

―盛田好一―

このたび「仏教聖地インド6大仏跡巡りの旅」に妻と共に参加しました。

8大聖地中6か所を、①祇園精舎と古代コ―サラ国首都舎衛城跡②シユラバステイ。

③仏典結集の地④バイシヤリ。ナールンダ仏教大学跡の見学後、⑤竹林精舎跡や霊鷲山⑥ラジギー

ル。⑤仏陀が悟りを開いた最も重要な聖地、マハーボーデイ寺院⑥ブツダガヤ。⑥初転法輪の地のダメークストウーパ、考古学博物館

⑦サルナート。の順に巡りました。

中でも、早朝の凜とした冷たい大気の中に広がる祇園精舎遺跡で、仏陀が説法(阿弥陀

経)なされた正にその場所で、お経を唱和してきました。これは一生の思い出となりました。

青木新門様、前住職様や他の僧職の方々からは、行く先々で、専門的な解説を聞き、幾度もこられた方々からは、以前との変容の違いなど拝聴でき、本当に有意義な旅行となりました。

インドは、都市部はインフラ整備も進み近代都市に発展していますが、巡った農村地帯はまだまだ貧しく、人と牛、犬、鶏、山羊等が、広大な大地の上で、渾然一体となって命をつないでいるように感じました。

(追記)

今回のインド仏跡旅行は、当寺にもお馴染みの「納棺夫日記」の著者で知られる青木新門さんが主宰し、日本子守唄協会理事長の西

館好子さん(劇作家故井上ひさし先妻)や前住職ご夫妻、門徒の盛田好一さんご夫妻をはじめ全国から14名の一行の旅でした。

○今年度第1回門信徒会役員会を開く

1/18

1月の初法座のあと開かれた門信徒会役員会は11名が出席し、先ず昨年度の決算報告・監査報告がなされて別紙のように承認されました。引き続き新年度予算についても事業費、運営費等ほぼ前年と変わらぬ編成で議決されました。

その他では特に昨年来から課題となっているお寺の維持・管理・保守等のメンテナンスにかかる費用の積立をしていく必要性から、28年度より門信徒の皆さまにお願いをすることになりました。

ご理解とご協力をお願い申し上げます。

○壮年会年次総会と新年懇親会開催

1/25

21名が出席しての年次総会は例年の如く錦織、水野両会員のお点前によるお供茶式によって始まり、わずかな静寂なひと時に皆で抹茶をいただきました。

総会では任期満了に伴う役員改選の時期でしたが石井保会長はじめ現役員が再選されました。

そして27年度の目標と方針も前年度を踏襲、壮年会活動に積極的に参加し親睦を深めていくことが決議されました。

続いて開かれた新年会では美味しいお酒に酔うほどに賑やかに懇親を深めました。

【宿縁廟法要・彼岸会法要修行】

☆期日：三月二十一日(春分の日祝日)

午後一時より

中原寺にご縁のあった方々の分骨を納めて末永く故人を追慕しつつ子々孫々にお念仏が相続されるようにとの願いから、ご本堂前に建立の「宿縁廟」(合葬)の法要は毎年三月の彼岸会法要が営まれる時間に先立って廟前で行われています。

この一年にご往生された方々の分骨をお納めし、併せてこれまで入廟されている方々の法要を廟前にてお勤めしますのでご参詣ください。尚、新たに納骨をされる方は当日十二時半までに受付をお済ませください。引き続き春の彼岸会法要が本堂で修行されます。

彼岸とは、サンスクリット語の「パーラミター」を訳した「到彼岸」(とうひがんに由來します。この語は漢字で「波羅蜜(多)」(はらみつた)と書き、それはすべてのものの真実を見極める智慧を身につけることです。この智慧を得ることによって、仏教ではこの世界(此岸)迷い)からさとり(彼岸)へ到達することを説きます。

お彼岸には、法要にお参りいただき、いのちあるすべてのものを彼岸の浄土に生まれさせたいという阿彌陀如来のおこころを聴聞してまいりましょう。

法話は、「老化と宗教心」と題し、宗教学者・明治学院大学名誉教授阿満利磨先生がご講話くださいます。

どうぞ求道心を発してお参りください。

【法座・行事のご案内】

○常例法座

二月二十一日(土) 一時〜三時

講師：増田将之師(仏教伝道協会)

○和讃に学ぶ(大経讀)

二月二十八日(土) 三時〜五時

講師：前住職

○いのちの居場所を考える会

三月五日(木) 十時半〜十二時半

講師：清水博先生(場の研究所所長)

○婦人会法座

三月七日(土) 一時〜三時

テーマ「歎異抄第六章」

講師：前住職

【二月の掲示板のことば】

仏の中に私がいる

私の中に仏がまします

仏と私は別ではない

(私を離れて、遠いところに如来さまがあるのではない。如来は私の内にも外にも、満ち満ちていて下さる。そして私とひとつになり、鈍な私に「きちんと合わせて」、どこにいても、何をしても、私のするままに任せて、それをそっくりひきうけて下さる。私が如来とひとつになるのではなく、如来が私とひとつになって下さった。あさましい心をそっくり取りこんで、如来ご自身の心として下さる。)